

カンボディア・アンコール遺跡群西トップ遺跡の調査

—第11次・第12次・第13次—

1 はじめに

奈良文化財研究所はこれまで継続的にカンボディア・アンコール遺跡群のなかの西トップ遺跡（Western Prasat Top）において、現地機関APSARAと共同で調査研究を続けてきた。現在の西トップ遺跡は、高さ約8mの中央祠堂を中心に南北に小型の祠堂を配し、東側にテラスを延ばす構成となっており、出土遺物および建築様式の検討から、これらは13世紀以降に整備されたものと考えられている。しかし遺跡からは9～10世紀の碑文も見つかっており、さらに現在の遺構に先行する時代の遺構の存在も一部で確認されている。そのため本遺跡は長期にわたって存続し、数度の改築を経てきたと考えられる。こうした遺跡の歴史の変遷過程を解明することは、本調査の重要な目的のひとつである。

本年度は中央祠堂前面の変遷をあきらかにするために、東テラス（仏教テラス）上の台座前面に調査区を設定し、3回に分けて小規模な発掘調査をおこなった。全体で平面T字型のトレンチ形状となっている（図12）。

（杉山 洋）

2 第11次調査

仏教テラスの西端、中央祠堂との接続部に、かつてテラス寺院の本尊を設置した台座と考えられる東台座が存在する。中央祠堂に東テラスが増設されたという変遷を想定した時、中央祠堂の東端部が東台座周辺にあたりと想定される。そこで増築の様相をあきらかにすべく、東台座の東側にトレンチを設定して発掘調査をおこなった。調査期間は2010年5月29日～6月1日、トレンチの大きさは東西3.5m、南北1mである（Jトレンチ）。

現地表面から10cmほど掘り下げると、砂岩製の仏像の頭部および光背部が検出された。また仏像と共伴した壺形土器の内部からは、青銅製指輪1点、ルビー小玉1点、金小玉1点、金剥片2点、鍍銀銅製品1点が見つかった。さらに現地表面から20～25cmほど掘り下げると、ラテライト石材が敷石状に分布するのが検出された。ラテライトの分布は東台座の前面から東側2.2mまでに限られ、

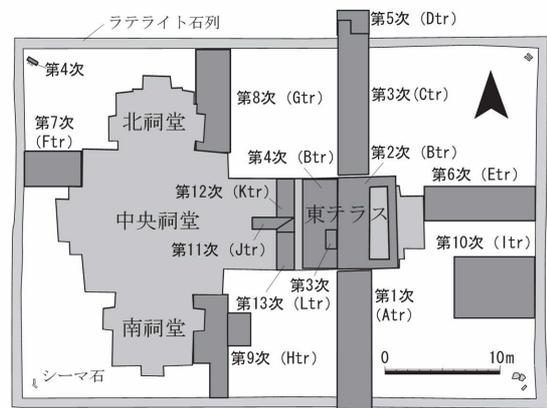


図12 西トップ遺跡のトレンチ配置図

その東側はほぼ垂直に落ち込むことが確認された。

こうした状況から、このラテライトによる敷石状遺構は現在見る仏教テラス構築以前の遺構である可能性が高く、おそらく中央祠堂東端部の構造に帰せられると推定される。その上で、本来存在したと考えられる砂岩製外装石材は抜き取られ、内部構造のラテライト石材のみが遺存しているものと推定される。さらに上層で確認された破損した仏像および壺形土器については、現在見る東テラスの構築の途中もしくはそれ以降に埋められたと層位的状況から推定される。さらに壺形土器の内容物からこれらは仏像の埋納にともなう供献物もしくは鎮壇具として埋納された可能性が高い。（石村 智）

3 第12次調査

第11次調査のトレンチ東端から北の東テラス基壇化粧石までの間を、南北2.6m、東西1.5mの調査区として設定した（Kトレンチ）。調査期間は平成22年8月13日および15～16日の3日間、調査面積は約3.9㎡である。

第11次調査での層位区分にしたがって、第1層から順に掘り進めた。第2層掘り下げ時にラテライト石材および炭をとまなう瓦集積、石造仏（仏像一個体分および以前の調査で出土したものと接合する破片2点）を検出したため、平面図を作成して遺物を取り上げた。瓦や石造仏は意図的に廃棄された様相と判断され、ラテライト石材は方向や角度から見て本来の位置から動いているものと判断された。続く第3層では、第11次調査区から続くものと考えられる正方形のラテライト石材を2枚検出したが、隙間なく敷きつめた状況ではなかった。同層からは施釉瓦などが出土したが、遺物からは第2層との時期差は認められなかった。ラテライト石材を原位置に残すために、以後調査区の東半分のみを掘り下げることにした。ここで、第4層の下端を把握するために第11次調査区をさらに掘り下げ、褐灰色砂質土からなる第5層を新たに確認した上で、第12次調査区の第4層を掘り下げた。第4層

は素焼土器片などが出土したものの遺物は少量であり、その下の第5層からは炭・焼土および陶磁器片が確認された。特に調査区中央付近で径15cm前後の炭集中箇所が検出されたため、樹種同定および放射性炭素年代測定のための試料採取をおこなった。(これらの分析結果については別稿)。

以上の発掘過程を通じて、第11調査次で検出したラテライトの石敷は北側に直線的に続くのではなく、西側へと規模を縮小させる様相が把握された。石敷は1石のみを横に並べる方式で、石積みではない。また、基壇外装は未確認である。いっぽう現在の基壇外側の砂岩列に沿ってラテライト石材を縦置きした列を検出したが、土層断面から内外列の時期差の有無を把握することはできなかった。

(庄田慎矢)

4 第13次調査

第12次調査の対称位置に、南北2.6m、東西1.4mの調査区を設定した(Lトレンチ)。調査期間は平成22年12月15日～20日。調査面積は約3.6㎡。

第11次調査区から続くラテライト敷石を1石確認し、それに続く敷石群を検出した。敷石の南側に沿う位置で、仏頭1体を発見した。南側東テラス砂岩基壇化粧石に沿ったトレンチ南側で、大量の瓦の堆積を検出した。同じような状況は第2次調査・第4次調査・第12次調査でも見ることができ、東テラスの南北砂岩基壇化粧石の内側には、連続した瓦の堆積のあることが確認された。第5層を掘り下げ中に、標高21.75mあたりで木製品の一部が発見された。掘り下げた結果、掘立柱の柱根の先端部であることが判明し、掘方等を確認しながら掘り下げ、最終的に断ち割りをおこない掘立柱最下部の状況と地山面との関係などをあきらかにした。掘立柱の掘方は南北60cm、東西70cmほどの隅丸長方形で、反時計回りで30度ほど傾く。掘方内の南寄りに径35cmほどの柱を据える。柱は円形の自然木の四面を削り、断面隅丸長方形に加工しており、底面は平面に切りそろえている。掘方の底には柱径より若干大きくラテライトチップを含む粘土層を敷き固めていた。

全体の層序は第12次調査時の検出層と基本的に同様で、地山上に大きく5層を確認した。黄灰色粘質土の地山上に炭化物と12世紀代の青磁や青白磁の破片を含む厚

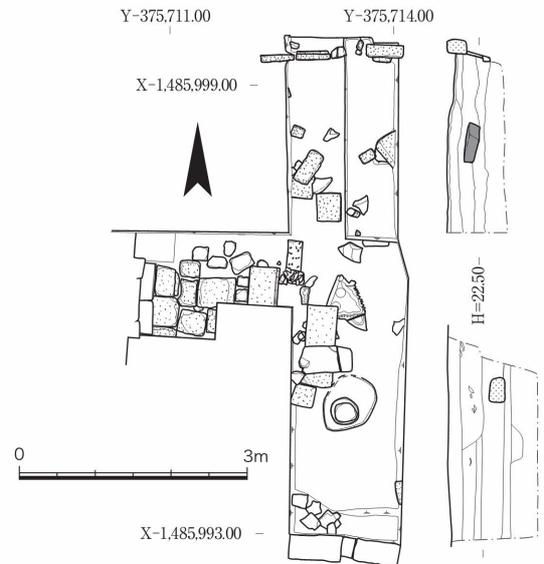


図13 第11～13次調査遺構平面図・立面図 1:100

さ約70cmの第5層が盛土される。掘立柱掘方はこの第5層上面から掘り込まれる。掘方に接するように東西溝が同じく第5層上面から掘り込まれる。第4次調査時に検出した下層ラテライト列との位置関係から、この溝は掘立柱建物にともなうラテライト基壇の抜き取り溝と考えた。掘立柱建物が廃絶した後、第4層と第3層が盛土され、その上にラテライトチップを含む薄い層を介してラテライト敷石が敷かれる。その後、ラテライト敷石の上に第1層と第2層が形成される。東テラスの基壇外装に沿うこの第1層と第2層から大量の完形品を含む黒褐釉瓦が出土した。このように東テラスおよびテラス上の木造建造物は複数の段階にわたって構築されてきたことがわかった。

(杉山・佐藤由似)

5 まとめ

今回の調査では大きく2つの重要な成果が得られた。1番目は掘立柱建物の遺構が確認されたことで、カンボディアの高温多湿な環境下で木材が遺存していたのは稀有な例である。アンコール時代の木造建造物で現存するものはなく、近年アンコール・トムの王宮内で木材が出土したのが数少ない類例であり、あわせて今後の研究の重要な資料となるだろう。2番目は計3体の仏像が出土し、内2体は切断された頭部のみであったことである。破損した仏像の出土はバンテアイ・クデイ遺跡でも確認されており、ジャヤヴァルマン7世(在位1188～1218)没後の「廃仏毀釈」と関連付ける解釈もあるが、本遺跡では鎮壇具とみられる遺物も相伴しており、仏像を埋納する行為の裏には複雑な背景があることが示唆される。

(石村)